

第22回「測量の日」記念講演会

社団法人高知県測量設計業協会理事（技術委員長） 右城 猛

まえがき

「測量法」が制定されたのは昭和24年6月3日である。社団法人日本測量協会では、測量を多くの人々に知っていただくとして6月3日を「測量の日」と決め、その前後の日に各種のイベントを各地で実施している。

社団法人全測連四国地区協議会では、毎年5月の定時総会の後で、「測量の日」地区推進協議会に共催する形で記念講演会を開催している。

今年は、5月17日に国際ホテル松山で、尺八演奏家の岳人山(がくじんざん)氏による「エジプトから日本へ」の講演が行われた。

講演の内容は、尺八に関する話題や中国思想などとても興味深いものであった。

岳人山氏のプロフィール

岳人山氏は、松山市を拠点に世界を股にかけて活躍している尺八演奏家である。昭和33年(1958)生まれで現在51歳。出身は福井県。

高校を卒業し、建設省近畿地方建設局に就職していたが、1年で退職して愛媛大学農学部に入學。昭和58年(1983)に大学院修士課程を修了されている。

在学中に郡山流尺八愛媛県コンクールで3年連続1位受賞や郡山流准師範試験主席合格に輝き、昭和61年には文部大臣賞を受賞。

平成21年からは愛媛大学教育学部非常勤講師も務められている。

尺八による演奏

講演は、15時30分から90分間にわたり国際ホテル松山南館1階鳳凰の間で行われた。

演題の「エジプトから日本へ」は、エジプトで生まれた「セビ」という楽器が、日本に伝わって「尺八」になったことを意味している。



二尺五寸管という尺八で演奏される岳人山氏

日本の伝統楽器のルーツがエジプトにあったのである。

最初に「風」という曲の演奏披露があった。1300年前の飛鳥時代の曲。平成15年に岳人山氏の最初のCDとしてリリースされている。

2曲目は「地平線」。中国の胡錦濤国家主席からの要望に応じて平成20年に来日されたときに国家主席の前で演奏した曲。限りない情景を表現した曲で、上海万博でも演奏する予定になっている。

その他に、講演の中で「ジュピター」「アメイジング・グレイス」「故郷」「埴生の宿」「旅愁」「雨降りお月さん」「花みずき」「千の風になって」「ルパン」「ミュージック No.6」などの曲が披露された。

ミュージック No.6 は、今年の9月にオランダで演奏することになっている曲で、まだ曲名が付いていないという説明であった。

尺八は音を出すだけでも難しい。まさに尺八の達人である。心の琴線を揺さぶる音色で演奏ができるようになるまでは、血のにじむ練習を積み重ねてこられたものと推測される。

尺八に関する話題

尺八の発祥地はエジプト。葦で作られ「セビ」と呼ばれていた。これがアフガニスタンに渡り、短くなって「ネイ」と呼ばれた。エジプト人は土間の生活をしていたのでセビは長かったが、アフガニスタンは絨毯に座る生活であったので短い楽器となった。

ネイはヨーロッパに渡ってクラリネットになった。「セビ」の音色を出すために、リードと呼ばれる口元で振動させる部品には葦が使用されている。

一口に尺八というが、尺七、尺六というのもある。尺八とは長さが一尺八寸。尺六は一尺六寸の長さ。一寸短くなると半音高くなる。



尺八、尺七、尺六の紹介

排簫

中国から遣唐使によって持ち込まれた楽器に排簫(はいしょう)がある。長短 18 本の素竹で構成された管楽器である。

下の写真の排簫は復元さもので、正倉院に保存されている。講演会会場で参加者に回されてきたので、手に取って見ることができた。



復元され正倉院に保存されている排簫



排簫(はいしょう)を演奏する岳人山氏。

排簫を演奏できる者は日本では岳人山氏しかいない。とても貴重なものであるが、岳人山氏が演奏の練習に使うと言えば貸し出しが許可されるということであった。

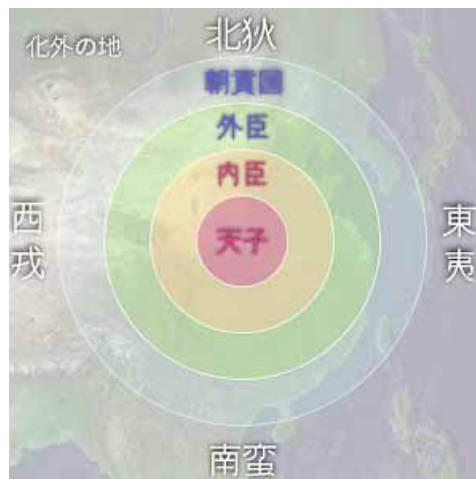
中国思想図

中国人が他民族をどのように見ているかを示したものに中国思想図がある。

中国思想図の中心に天子と書かれている。天子とは漢民族のこと。円の外に行くほど地位が低い民族を意味している。

右の円の外には、東夷(とうい)と書かれている。夷は大と弓を重ね合わせて作られた漢字で、東夷は東方の戦の好きな民族、日本人を表している。

円の下の南蛮(なんばん)は、東南アジア諸国や南方から渡航してきた西洋人など中国の朝廷に従わない異民俗。



中国思想の概念図(岳人山氏の配布資料)

円の左の西戎(せいじゅう)は西域と呼ばれた諸国。円の上の北狄(ほくてき)は、モンゴル人など北方の文化を共有しない民族。

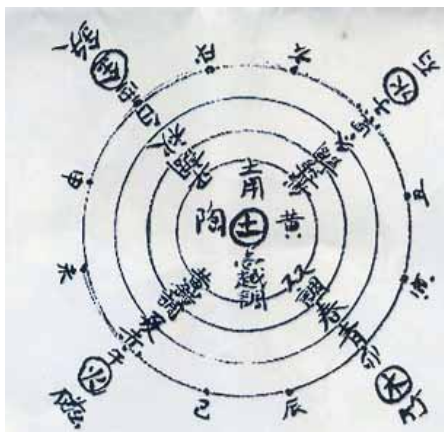
中国とは国の中心という意味。中国人は、世界は中国を中心に回っていると考えている。

鎌倉時代の管弦音儀

鎌倉時代の管弦音儀についても説明を受けた。中国伝来の五行思想のようなものと思うが、音楽の知識がない私には詳しくは理解できなかった。

分かったのは、サルとキジとイヌをつれて鬼退治に行く桃太郎の話が、管弦音儀に基づいて作られているという話。

桃色は赤と白の中間色。管弦音儀で赤は午(ウマ)、白は酉(トリ)。桃色に相当するのが未と申の間。そこから右回りに進むと、桃太郎の家来となった申(サル)、酉(トリ)、戌(イヌ)となる。もし四人目の家来があったとすると亥(イノシシ)になる。



鎌倉時代の管弦音儀(岳人山氏の配布資料)

ピタゴラス

学閥や派閥の対立はどこにもあるが、音楽の世界ではそれがより激しいと言われている。尺八演奏家として世界的に活躍している岳人山氏が音大卒でなく愛媛大学卒であるのは意外であった。

岳人山氏は天賦の才能を持って生まれ、音楽家である父・橋本恒山氏に幼少の頃から厳しい指導を受けてこられたので、学閥や派閥を超越した実力を備えることができ、「出る杭は打たれるが、出過ぎた杭は誰にも打てない」ということである。

岳人山氏は尺八演奏家というだけでなく、音楽理論に対しても詳しい。講演の中でピタゴラスという言葉がたびたび出てきた。我々がよく知っているのはピタゴラスの定理。三平方の定理であるが、岳人山氏が話されたのは、ピタゴラス音律のことであった。

ピタゴラスが鍛冶屋の金槌の音を聞いて、その金槌の重さの比率から協和音程の振動数の整数比を発見し、それを基に弦楽器の弦の長さや振動数の比率を利用して考案されたものであるようであるが、音楽に無知な筆者には皆目理解することができなかった。

懇親会

記念講演の後、本館の常磐の間に移り、全測連四国地区協議会と愛媛県測量設計業協会の合同の懇親会が開催された。



来賓で出席された愛媛県の加戸知事が、岳人山氏の尺八の演奏で十八番の赤城の子守歌を熱唱。



加戸知事はカラオケの大ファン。歌のレパートリーは150曲以上。歌詞も台詞も暗記されている。

あとがき

閉会の挨拶で、全測連四国地区協議会の小田義人会長が、「尺八演奏家という肩書きから、和服を着た古風な老人を想像していた」と話されたが、参加者のほとんどが同じ思いをしたと思う。

尺八のイメージも百八十度変わった。日本の古典音楽というよりも初めて聴く新鮮さを感じた。岳人山氏の尺八の音色には心が癒され、不思議と気持ちが落ち着いた。

「物事が当たり前になっているには根拠がある。その根拠を知ればその先が見えてくる」

師匠から教わった言葉だと言われていたが、岳人山氏は既にこの境地に達しているのだろう。

人々の感性は時代と共に変化する。現代の人々の心を癒す原理を知り、新たな作曲・演奏に活かしているのだと思われる。

岳人山氏の講演を聞きながら、高知県測量設計業協会のことを考えていた。

わが国ではこれまで、土木設計のマニュアルを充実させ、設計を標準化してきた。遅れていた社会資本を短期間に整備する上で最も効率の良い方法であった。

ところが、いつの間にか、マニュアルや標準設計の根拠が分かる技術者が少なくなってしまった。20年くらい前からコンピュータが普及し出すと、土木の基礎知識がなくても設計が当たり前できるようになり、マニュアルや標準設計がどのような理論に基づいて、どのような仮説の上に成り立っているかを分かる技術者は県内にほとんどいなくなってしまった。

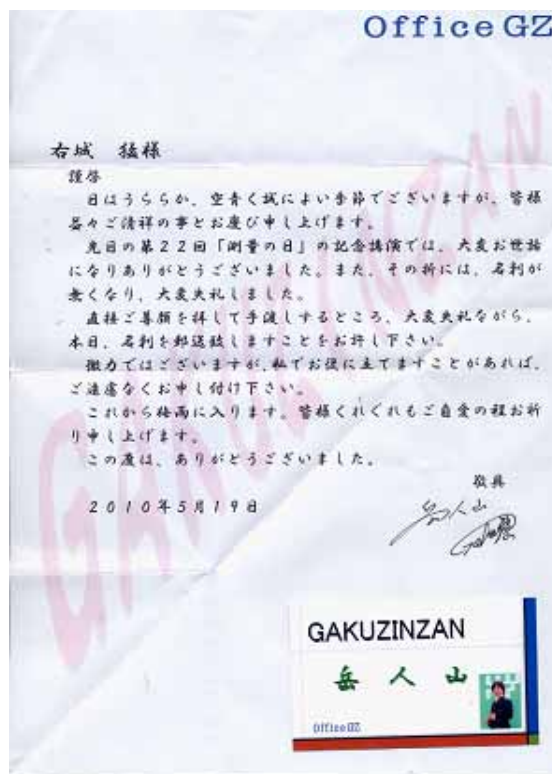
マニュアルやコンピュータを駆使し、業務の効率を高めることは、利益を追求しなければならない企業としては当然であるが、それだけでは企業の将来はない。

高知県測量設計業協会を発展させるには、マニュアルを理解できるだけの技術力を持つ会員を養成する必要がある。その役割が技術委員長になった著者の責務であろう。



高知県測量設計業協会の橋口孝好会長(写真右端)と岳人山氏を挟んで記念撮影。岳人山氏はとても気さくな方である。懇親会の席やその後に行ったスナックでいろいろと話しを伺うことができた。

「四国は一つと思っている。呼んでいただければいつでも高知にお邪魔したい」という大変有り難い言葉もいただいた。



講演会の数日後に、岳人山氏から丁寧な礼状と名刺が送られてきた。超多忙な間隙を縫っての手紙だと推察される。改めて岳人山氏の人柄に魅せられた。

(2010年5月28日記)